語文と教育　第二十七号　抜刷　平成二十五年八月三十日　鳴門教育大学国語教育学会

モラエス来徳一〇〇年

――一九一三（大正二）年七月四日――

秦　敬一

モラエス来徳一〇〇年

――一九一三（大正二）年七月四日――

秦　敬一

一

『徳島の盆踊り』や『おヨネとコハル』を著し、日本を海外に紹介したポルトガルの文人、ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエスが徳島に隠棲したのは、一九一三（大正二）年の夏のこと。モラエスは一九二九（昭和四）年七月一日にこの世を去っているので、徳島で暮らしたのは実質十六年間であった。

そのモラエスが徳島に第一歩を印したのは、今（二〇一三年）からちょうど一〇〇年前の一九一三（大正二）年七月四日である。これはモラエスがその著書『徳島の盆踊り』の中で次のように述べていることから、ほぼ疑いようのない事実ということになっている。

夏の晴れた日の午後――正確に言うと、一九一三年七月四日の午後――船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住居に歩いて行ったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑……という圧倒的な、だが快い印象であった！　陶酔した瞳の中にどっと入りこむ緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！　……何ひとつ考えることをゆるさない、目の前にくりひろげられてゆく風景のディテールに注意を向けることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。だが、私がそのときに感じたことを言葉で言いあらわすことは不可能だ。長いあいだ小屋に閉じこめられていたあと、いきなりすばらしい牧草地の真ん中に引き出された飢えたロバ――下品なたとえを勘弁してくれたまえ――の気持ちが私の印象にちかいにちがいない。私の感情が一時的に特殊な状態に陥ったためなのか、それとも実際に、私が特別な境遇におかれていたせいなのだろうか？それはわからない。

旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋の長い道沿いの左手に、家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶった様子で聳えている。そして、その山とちかくの田畑から繁茂する植物のいがらっぽいにおいが鋭く私の鼻をつく。創造者、変容者としての永遠の営みにいそしむ母なる自然から発散する生の神秘的発酵物の香気の

ように。

緑、緑、緑一色[1]！　……

二

さて、そのモラエスが徳島に来た一九一三（大正二）年の七月四日は、どういう一日だったのだろうか。

モラエスが徳島に来るようになった事情を考えながら、その前後の状況を今一度検証してみたい。

戦前からモラエスを研究してきた南欧文学の研究者である花野富蔵は、一九四〇（昭和十五）年のモラエスの伝記『日本人モラエス』の中で、このように描いた。

モラエスが徳島の土を踏んだのは七月四日の夕方であつた。

その日はたいへん良い天氣で、朝、神戸市兵庫の島上から阿攝航路の汽船に乗り、夕方、徳島市の中洲に着いた。現在同航路の汽船は小松島に着くが、當時はまだ小松島港が築港されて居らず、徳島港内の中洲波止場に船がはひつてゐたのである。

モラエスは上陸するとすぐ人力俥に乗つて徳島市中通町の志摩源といふ旅館にはひつた。モラエスはその「徳島の盆踊」の中で、徳島に着いてから、緑に匂ふ二軒屋町をゆつくりと通つて伊賀町の寓居に入る情景を巧みに描いてゐるが、これは恐らく徳島の緑の美しさを強調するためにあんな風に書いてゐるので、事實は右の旅館へ俥で乗りつけたのである。[2]

さらに徳島出身の作家佃實夫は、伝記的小説『わがモラエス伝』でモラエスが徳島へ行く、その日の様子をこう書いている。

夜の白々[しらじら]あけにモラエスは、ニキチ・ヨネザワの貸家――住み慣れた加納町の家を出た。門を出て振り返ると、「貸家」と下手な字を書いた木の札が門柱にとめられていた。

徳島行の汽船は夜である。今さら有馬へ行く気はなかった。が、夕方までの時間をもてあましそうな予感がして、どこへ行こう……、とモラエスは迷った。考え込みながら彼は、ひどく空腹であるのを感じた。外人相手のホテルやレストランのいくつかが想念に浮かんだ。徳島へ行けば、うまい西洋料理ともお別れである。ビーフ・ステーキを腹いっぱいつめこもう、と彼は思った。生野菜も喰べよう。セロリー、アスパラガス、レタスと、久しく口にしなかった西洋野菜に、饑餓[きが]に似た食欲が湧く。ホテルで休み、食事が終ったら……。けっきょくすることがない。そうだ、須磨寺まで、散歩しよう。もうこれが最後なのだから、と決めたのは、目指すホテルが見え始めてからだった。

その夜、年下の友だちペドロ・ヴィセンテ・ド・コート

と旧部下の青山に見送られて、兵庫島上の港からモラエスは乗船した。淡路の島影は闇に没してまったく見えず、海上には風波と軽いうねりがあった。

ときに一九一三（大正二年）七月四日――、モラエス五十九歳であった。

（中略）

徳島へ着いたモラエスは、以前に何度か泊ったことのある旅館「志摩源」に落ちつき、やがて斎藤ユキの探してきた、伊賀町三丁目の借家へ住みつく。斎藤コハルという門札を掲げ、二十歳の新しい愛人との生活が始まる……。[3]

この佃實夫の『わがモラエス伝』には、徳島へ着いた時の時系列に沿った具体的な様子は描かれていないし、徳島へは夜の船旅になっている。詳しく描かれるのは、モラエスの神戸から徳島に向かうにあたっての心象風景と大まかな事実である。ただここでも志摩源への宿泊は花野説に沿っている。

近年、花野富蔵以来の本格的なモラエスの研究を行った岡村多希子は、その伝記『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官の生涯』の中で、この徳島へ来た日の状況を次のように考察している。

彼の新居は、市街からほど遠からぬ眉山のふもとの伊賀町三丁目にある新築の四軒長屋であった。『徳島の盆踊り』は、その長屋にいたる途中の道筋の緑あふれる風景の印象を語りつつ、「旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いて行く二軒屋の長い道沿いの……」と続く。二軒屋は徳島市北部の町名であり、また小松島港から徳島へいたる途中の鉄道駅の名称でもある。つまり彼は小松島港で船を下り、鉄道で二軒屋まで来て、そこから歩いて伊賀町の新居に入ったのである。[4]

この岡村説と花野説で大きく異なるのは、モラエスの『徳島の盆踊り』の記述をどう読むかという点である。

花野富蔵は、前述のように『徳島の盆踊り』について、《モラエスは上陸するとすぐ人力俥に乗つて徳島市中通町の志摩源といふ旅館にはひつた。モラエスはその「徳島の盆踊」の中で、徳島に着いてから、緑に匂ふ二軒屋町をゆつくりと通つて伊賀町の寓居に入る情景を巧みに描いてゐるが、これは恐らく徳島の緑の美しさを強調するためにあんな風に書いてゐるので、事實は右の旅館へ俥で乗りつけたのである。》と書いている。

これに対して、岡村多希子は、『徳島の盆踊り』を引用しながら、《二軒屋は徳島市北部の町名であり、また小松島港から徳島へいたる途中の鉄道駅の名称でもある。つまり彼は小松島港で船を下り、鉄道で二軒屋まで来て、そこから歩いて伊賀町の新居に入ったのである。》と書いていて、このモラエスの記述を事実に沿ったもの、ノンフィクションと捉えていることがわかる。

モラエスが事実を書いたとすると、確かに岡村説のように、

この日、大正二年の七月四日にモラエスは、神戸港を出港し、小松島港に着いた。そしてそこから鉄道を利用して、二軒屋の駅で下車し、そのまま、歩いて伊賀町の新居にたどり着いたということになる。なるほど、『徳島の盆踊り』の文章を素直に読むと、この形が一番自然である。

しかし、『徳島の盆踊り』をよく読むと、《夏の晴れた日の午後――正確に言うと、一九一三年七月四日の午後――船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住居に歩いて行ったとき》とあって、二軒屋駅で汽車を下りたとは言っていない。「船を下りて」とは言っているが。どこで下りたということまでは言っていないのである。岡村多希子が二軒屋駅で下りたとするのは、《旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋の長い道沿いの左手に、家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶった様子で聳えている。》という描写があって、モラエスが眉山山麓にそって、二軒屋から伊賀町に向かったということが推測できるからである。

しかし、この時、モラエスの荷物はどうなっていたのであろうか。ここで、気になるのは徳島側の受け入れ体制である。徳島でモラエスが頼りにするのは、以前から親交のある斎藤家の人々であり、歩いて二軒屋の駅から行ったとすると、二軒屋の駅には斎藤家の誰かが迎えに来ていて、伊賀町の新居まで案内したと考えるのが自然であろう。大きな引っ越し荷物は、その時、まだ斎藤家で預かっていたのか、それとも、もう伊賀町の家に運び込んでいたのかはわからないが、モラエスが歩いて伊賀町まで行ったとすると、持つのは手荷物程度で、それほど大きな荷物は持てそうにない。この時点で、引っ越しはどれくらい進んでいたのか。

モラエスの最初の本格的な伝記である『日本人モラエス』は、岡村多希子がその解説の中で、《終戦直前の徳島空襲ですべて失われてしまった県立光慶図書館のモラエスの遺品、日記、メモ、未刊の作品などを花野は、モラエス伝記を書くにあたって、丹念に調査している。「日本人モラエス」によってはじめて知り得る事実が多数ある。そういう意味で、本書は得がたい資料といえよう。[15]》と述べているように、著者の花野富蔵は当時、昭和十五年前後に、できる限り資料を集め、調査をした上で書いている。しかし、それでもわからないことは多い。

実際、『日本人モラエス』を読むと、断定的に書いているところと、そうでないところがある。たとえば、『徳島の盆踊り』の解釈については、「恐らく」と書いていて、このモラエスがどういうルートで伊賀町の新居に行ったかは、花野自身もはっきりとはわからないことを示唆している。しかし、モラエスが着いてすぐに旅館の志摩源に入ったことは、かなり断定的に書いていて、誰かの証言か記録した資料があったことをうかがわせる。

つまり、当時の中洲港（現在の徳島港）からまず、中通町の志摩源に入って旅装を解き、そこから伊賀町へ行くには、『徳島の盆踊り』のコースとは逆のコース、伊賀町の西側から入るの

が通常、考えられる行き方だからである。

花野がこの『徳島の盆踊り』の記述をフィクションだとするのは、花野には、モラエスがまず港から志摩源に入るという前提があることと、仮にモラエスが中洲港から伊賀町へ直接行ったとしても、おそらくは人力車を使って行くことになろうし、それでも二軒屋まわりということは考えられないからである。まして徒歩なら言わずもがなであろう。

ただ、このモラエス来徳に関して、すでに岡村多希子も『モラエスの旅』の中で触れていることだが、花野の事実誤認と思われる箇所が一つある。それは、航路についてのことで、花野富蔵は、モラエスが中洲の港に着いたとする理由を次のように述べている。

> その日はたいへん良い天氣で、朝、神戸市兵庫の島上から阿攝航路の汽船に乗り、夕方、徳島市の中洲に着いた。現在同航路の汽船は小松島に着くが、當時はまだ小松島港が築港されて居らず、徳島港内の中洲波止場に船がはひつてゐたのである。(6)

花野は、大正二年の七月には神戸と小松島の間に航路はなかったと考えているのだが、実はこの時、小松島へは神戸からの船が着いていたのである。

『徳島市史』第三巻（産業経済編・交通通信編）には、徳島と阪神間を結ぶ阿摂航路について次のような記述がある。

大阪商船は、徳島市街に近い福島港へ明治二十六年十一月に転港し、阿波国共同汽船は、後を追って同二十八年に移したが、同三十三年六月に徳島市堀裏町巽浜（現幸町三丁目）へ転港した。大阪商船は、同年六月に新造船徳島丸（鋼製三一五ト）を就航させ、明治三十五年六月に巽浜の港の対岸富田浜に移った。阿波国共同汽船は翌三十六年三月に第六共同丸（三八八ト）を建造して昼夜二便の運航を開始し、一般貨客の利便を図った。さらに明治四十二年三月、第一一共同丸（鋼製三七五ト）を建造して就航させた。阿摂航路は木造船から鋼鉄船へと近代化の時代に入っていった。

巽浜の港は川口にあるため、出入船舶の制約が致命的で、増大する貨客の需要をさばききれないので、阿波国共同汽船の株主らは大正二年（一九一三）四月、阿波国共同鉄道を建設した。これにともなって、阿波国共同汽船は小松島・阪神間の航路を開設し、鉄道との連絡運輸を始めた。鉄道の建設にともない新町川に鉄橋が架設されたので、富田浜の港に船舶が出入できなくなった。そこで大阪商船の船の一部は、堀裏町字中洲（現中洲町）に移っていった。これによって、従来の阿摂航路は徳島・阪神間であったものが、小松島・阪神間の阿摂航路といわれた。徳島港は、貨客の港として、にぎわいをなくして、さびれてしまった。(7)

この事実が岡村説の根拠になる。つまり、大正二年の四月の

段階で、神戸から小松島へは船で、そして小松島から徳島へは鉄道でというコースが可能になっているのである。

このことによって、『徳島の盆踊り』の合理的な解釈ができると岡村多希子は考えた。

また、岡村は、神戸・小松島間の航路についてモラエスの認識を《「もし船が、そうあってほしいと思っているように、直接に徳島に行かない場合には、小松島で下船して、すぐに鉄道に乗って二軒屋まで来て、そこでぼくの家への道順をたずねてくれたまえ、すぐ近くだから」[8]》という一九一三年七月十一日付のコート宛ての私信をその論拠としている。つまり、この私信によって、モラエスが小松島から鉄道を利用する方法を知っていたということがわかる。しかし、この私信にある《もし船が、そうあってほしいと思っているように、直接に徳島に行かない場合には》とは、どういうことであろう。航路としては、まだ一般的には、神戸と徳島を結ぶルートの方が認知されていて、このルートを利用する人が多かったということなのではないのだろうか。

理屈の上では、確かに岡村説は合理的である。ただ、考えなければならないのは、モラエスがこのコースをとったという確証がないということである。中洲港へ来たのか、小松島港に着いたのか、どちらとも可能にはなったが、実際、モラエスがどのコースを来たのかはわからない。

また、岡村説に立つ時、モラエスの書いていることはすべて事実ということになろうが、このモラエスの文章の冒頭部分、《夏の晴れた日の午後――正確に言うと、一九一三年七月四日の午後――》というのが気になる。

この日の天気である。

徳島の気象の記録である『徳島の気象１００年』によると、一九一三（大正二）年七月の一日から四日までの天気は次のようになる。

七月一日　晴れ
　　二日　晴れ
　　三日　曇り
　　四日　小雨[9]

この記録からわかるように、『徳島の盆踊り』の「夏の晴れた日の午後」が事実だとすると、その日は、七月の一日か二日になって、三日や四日ではないことになる。四日は晴れておらず、小雨さえ降っている。岡村説はモラエスは事実を書いているということが前提なのだから、ここでその前提がくずれる。

実際は脚色や創作があって当然の文学作品なので、虚実綯い交ぜでよいのだが、もしそうだとすると、この二軒屋から歩いて伊賀町まで行ったということも花野富蔵の言うように、フィクションだとも言えるのではなかろうか。ただ、文脈からいって、天気の方は、夏の暑い一日というイメージから晴天だとしてもそれほど不自然ではない。それに比べて伊賀町までの道筋については、あえて他のコースにする必要はないようにも思わ

れる。つまり、二軒屋から伊賀町に行ったというのは、やはり事実なのではないかと思えてくる。

このモラエスが伊賀町に行ったコースについて、花野説でも二軒屋方面から来ることが可能な場合が一つある。それは、モラエスが中洲港から斎藤家に寄って、あるいは志摩源から斎藤家に寄って、伊賀町へ向かったと考えた場合である。花野によれば、神戸からの荷物は斎藤家宛てで送られているわけだから、斎藤家に寄った後で、斎藤家の誰かの案内で伊賀町まで歩いて行くということはあり得る。その場合、金比羅神社あたりから西に向かうと、モラエスの記述に近くなる。

また、モラエスが徳島に来た日が四日ではなくて、一日だったとすると、天気は晴れである。このあたりの問題をうまく解決しているのが林啓介の『「美しい日本」に殉じたポルトガル人―評伝モラエス』である。この著作の中で、林はモラエス来徳時の状況を次のように記述している。

公職を返上し、徳島移住を決めると、モラエスは身辺整理にとりかかった。まずポルトガル領事館の事務一切をメキシコ領事に代行してもらい、引っ越し荷物を厳選した。「不要なものは捨て、荷物はできる限り少ない方がいい」と考えた彼は生活や研究に必要な最小限のもの以外は、実にあっさりと知人や近所の人に分け与えてしまった。厖大な数の蔵書の内、愛読書千冊ほどを残して古本屋に売り払った。

こだわりをみせたのは仏壇と絵葉書だった。おヨネの位牌や遺品を収める仏壇は、特別に運送屋を頼んで心付けをはずんだ上で、こわさないようにと何度も念を押した。また百枚ほどの絵葉書は妹をはじめ故国の知友への音信に使うため、一枚一枚紙に包んで箱に入れた。

こうしてまとまった十一個の荷物を六月三十日に、山口合名会社神戸支店に託した。あて先は徳島市富田浦町堀淵、斎藤直太郎（ヨネの姉トヨの子）及び斎藤コハルであった。

さまざまな残務を処理し、各方面への別れの挨拶を済ませて、彼が徳島に向かったのは、一九一三年七月一日のことだった。

当時、兵庫の島上港から徳島の中洲港行きの船が出ていた。阿摂航路である。この航行は一部瀬戸内海から外洋へ出るため、乗船申込書が必要だった。モラエスは一等の申込書に「神戸市兵庫区加納町、モラエス、五十九歳、男」と記入した。職業欄だけが空白のままになった。二円五銭を払うと白い切符が手渡された。彼は見送りのコートと領事館の竹内通訳を振りかえると、白い歯を見せた。三百七十五トンの汽船、第十一共同丸の甲板に立って、彼は遠ざかる六甲の山並みをいつまでも見詰めていたという。

（中略）

神戸からモラエスを乗せた船は、午後六時半に徳島の中洲港に接岸した。運河の小さな支流が集まったような港だった。小さな荷船の往来や安宿や居酒屋が波止場を取り

巻いているありさまは、どこかマカオを連想させた。すぐ車を呼んで定宿の「志摩源」へ入ると、彼はペンを執った。

（中略）

七月四日の午後、ユキの案内でモラエスは借家を見に行くことになった。それは彼の希望通り山すその閑静な住宅街にあった。昔の藩政時代に伊賀者が住んでいたことから伊賀町と呼ばれる区域であるが、正式名は富田浦町西富田であり、モラエスの借家は一五四三番地だった。新築したばかりで、まだ木のにおいが鼻をつく二階建て四軒長屋の南端にあたる一軒である。土台は眉山からの浸水に備えてか道路より一段高くしてあり、入口の一間ほどの格子戸をくぐると、一坪ほどの庭があり、一本のカシの木と青い庭石があった。

家賃は三円五十銭、神戸の加納町の家の十分の一にすぎなかった。彼はその家に決め、すぐ隣に住む橋本富蔵という大工に引っ越しの挨拶に行き、深々と頭を下げた。[10]

林啓介のモラエス来徳の描写は、『日本人モラエス』を踏まえ、小説的な脚色はあるものの、基本的には事実に基づいていて、創作的なものを極力抑えている。

この中で林は、モラエスが徳島に向かったのを七月一日としているが、これには、一つの傍証がある。

岡村多希子の『モラエスの旅』の中に、モラエスが神戸を離れる日付について、《ヴェンセスラウが神戸を離れた日については、先のメキシコ領事テレス報告書は、事務引き継ぎをすませた翌日の七月一日朝としているが、彼自身は徳島での生活を描いた『徳島の盆踊り』のなかで徳島に着いた日のことを述べる件（くだり）で、「一九一三年七月四日の午後船を下りて、私ために用意されていたごくささやかな住居に歩いて行った」と言っており、そうであるとすれば、四日の朝に神戸をでたことになる。[11]》という記述があって、モラエスが神戸を出たのがメキシコ領事テレス報告書どおりだとすれば、林説の説得力は増す。

さらに、林説では、モラエスは志摩源に宿泊して、四日の午後に伊賀町の家を斎藤ユキの案内で見に行っている。この時、斎藤家に立ち寄ったとすれば、眉山を左側に見て、伊賀町の家に向かうことも可能である。

三

以上、みてきたように、モラエスが徳島へ来た日の状況については、諸説あって、どの説もどこかに無理がある。すべて推理、推測の域を出ない。

ただ、素直にモラエスの『徳島の盆踊り』を読めば、岡村説が一番説得力があるということはできる。モラエスは、徳島へ来た日、小松島から鉄道を利用して、二軒屋駅で降車して、歩いて伊賀町に向かったというのが『徳島の盆踊り』の描写と最も矛盾しない解釈である。《旅に疲れ、病気でいささか衰弱（すいじゃく）してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋（にけんや）の長い道沿（ぞ）いの左手に、

家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶった様子で聳えている。》という描写は経験を踏まえないと書けないもののように思われる。

逆に、花野説で『徳島の盆踊り』を読み解こうとすると、状況を幾つか設定してもどこかに不自然さが残る。

したがって、『徳島の盆踊り』の一九一四年四月十五日の章で「夏の晴れた日の午後」としている点を除けば、岡村説にそって、七月四日の朝、まず神戸から小松島行きの船に乗り、小松島港から汽車で徳島に向かって二軒屋駅で降車したとするのが、最も自然なのかもしれない。そして、その夜の宿泊が旅館の志摩源ということなら、大すじで花野説とも矛盾しない。

しかしながら、事実は一つなのであって、理論的に破綻がないからといって、正しいとは言い切れない。客観的に納得できる資料、たとえばモラエスの日記でもない限り、この問題は解決しそうにない。

『日本人モラエス』と『わがモラエス伝』、『「美しい日本」に殉じたポルトガル人―評伝モラエス』、そして『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官の生涯』という四冊のモラエスの伝記（伝記的小説）を比較検討してきたが、前述のように『わがモラエス伝』と『「美しい日本」に殉じたポルトガル人―評伝モラエス』は、『日本人モラエス』を下敷きにしていて、七月四日のモラエスの行動は花野富蔵の解釈に拠っている。

そして、この花野の解釈と岡村多希子の解釈における出発点の大きな違いは、大正二年の七月に、神戸と小松島を結ぶ航路がすでに開設されていたという事実を知っていたかどうかという点にあった。

もし花野が昭和十五年の『日本人モラエス』刊行時にこの事実を知っていたならば、『徳島の盆踊り』に関する考え方もかなり変わっていたと思われる。花野は、モラエス来徳時に、神戸から小松島への航路はなかったという思い込みがあるために、モラエスの記述を初めからフィクションだと決めつけたのである。もし、花野が小松島にモラエスが着くことを仮定したら、ポルトガル語が読める彼は、岡村と同じようなことを考えたに違いない。モラエスが徳島に来る場合、中洲港に着くのと小松島港に着くのとでは、その後の行動がずいぶん違ってくるであろうからである。

注

（1）W・モラエス著　岡村多希子訳　『モラエスの日本随想記　徳島の盆踊り』（ことのは文庫）　財団法人徳島県文化振興財団　徳島県立文学書道館　二〇一〇（平成二二）年三月三十一日第一刷発行　五十九～六十一頁

（2）花野富蔵　伝記叢書185　『日本人モラエス』　大空社　一九九五（平成七）年十月二十二日発行（以下、『日本人モラエス』と略記。）一三七～一三八頁

（3）佃實夫　『わがモラエス伝』　河出書房新社　一九六六（昭和四十一）年十月七日初版発行　一七四～一七六頁

（はだ　けいいち・ＮＰＯ法人モラエス会）

（4）岡村多希子　『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官の生涯』　彩流社　二〇〇〇（平成十二）年二月二十九日発行（以下、『モラエスの旅』と略記。）二三八頁
（5）『日本人モラエス』〈解説〉五頁
（6）『日本人モラエス』一三八頁
（7）徳島市史編さん室編　『徳島市史』第三巻　産業経済編・交通通信編　徳島市教育委員会　一九八三（昭和五十八）年三月三十一日発行　七一三～七一五頁
（8）『モラエスの旅』二三九頁
（9）徳島地方気象台・日本気象協会編集　『徳島の気象100年』　徳島出版株式会社　一九九一（平成三）年十一月十五日発行　二八二頁
（10）林　啓介『「美しい日本」に殉じたポルトガル人―評伝モラエス』（角川選書二八一）角川書店　一九九七（平成九）年二月二十八日初版発行　一四八～一五二頁
（11）『モラエスの旅』二三八頁

〈追　記〉

モラエスの伝記を比較検討した本稿に関連して、モラエスが徳島に隠棲した折のコースを中心に、すでに岡村説に沿って実証的な分析、考察を行った論考「モラエス来徳日時・ルートについての一考察」（モラエス会会誌『モラエス』第9号所収・二〇〇六〈平成十八〉年六月一日発行）が深沢暁氏（天理大学）によって発表されていることを付け加えておきます。